

Title	経済学の科学的性質の変遷 (上)
Sub Title	
Author	大矢知, 昇
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.12 (1915. 12) ,p.1462(126)- 1477(141)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19151201-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟學の科學的性質の變遷 (上)

大矢知 昇

參考書

Schumpeter, Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung.
 Sombart, Der moderne Kapitalismus.
 Do., Der Bourgeois.
 Gans=Ludassy, Die wirtschaftliche Energie.
 Bergson, Einführung in die Metaphysik.
 Gerlich, Geschichte und Theorie des Kapitalismus.
 Fuchs, Volkswirtschaftslehre.
 Gide, Principes d'Economie Politique.
 Gide et Rist, Histoire des Doctrines Économiques depuis les physiocrates jusqu'à nos jours.

Espinas, Histoire des doctrines Économiques
 Mm. Bergson. & C. Le matérialisme actuel.
 Ryan, Salaire et Droit à l'existence.
 Quesney, Tableau Aeconomique(London, 1894)
 Bonar, Philosophy & political Economy.
 Marshall, Principles of Economics,
 Cossa, Primi Elementi di Economia Sociale.

目 次

- 第一章 序論
- 第二章 物理的意味に於ける富の觀念の發達
 - 第一節 フイヤーオクランメイの價值論
 - 第二節 勞動と價值
 - 第三節 欲望と價值
 - 第四節 信任と價值
- 第三章 倫理的意味に於ける富の觀念の發達
 - 第一節 經濟行爲の動力としての快樂の欲望
 - 第二節 經濟行爲の動力としての權力獲得の欲望
 - 第三節 經濟行爲の動力としての義務心
- 第四章 結論

第一章 序論

Mais c'est dire aussi que la vie de l'esprit ne peut être un effet de la vie du corps, que tout se passe au contraire comme si le corps était simplement utilisé par l'esprit, et que dès lors nous n'avons aucune raison de supposer que le corps et l'esprit soient inséparablement liés l'un à l'autre. Bergson, Le Matérialisme actuel, p. 45. (L'âme et le corps.)

此は形而上學本體論に關する有力なる最近主張の一たるは力説の要なし。否な外形的方面より見れば相懂着せるが如き觀ある斯學に於ける他の主張も其根底に於いては此主張と頗る一致するなり、生の體驗、實現、創造を主張する即之れなり。換言すれば、一元論的唯物論の不可解的見解なるを明かにするに於いて一致せることは是れなり。此變化は管に形而上學に於ける變遷發達を意味するものにあらず、既に他の科學の來るべき將來に於ける變遷發達を明示するもの

なり。蓋し形而上學は諸科學の實在的基礎を検するものなればなり。他方より論すれば此形而上學上に於ける變化は他の諸科學のすでに變遷發達せしを示すものなり。蓋し形而上學は或る意味に於いては超經驗なるも尙經驗を離るゝこと能はず。換言すれば形而上學は其認識根據(Erkennnisgrund)を諸科學に依頼するが故なり。物理學のエネルギー及太陽及地球熱に關する教への變遷は(從來の物理學の教ゆる所によればエネルギーは熱エネルギーに類廢し、終には利用すべき力なきに至るとか或亦太陽及地球の熱は終には冷却して生物の生存を不可能ならしむる等の見解を持したりしが最近の物理學は無限の發達を教へり)無限の創造を主張せる最近の世界觀を生みたるが如きは其一例たり。然り、前者の變遷は後者の變遷を促し、後者の發達は前者の發達を齎らすものなり。されば上述形而上學に於ける變遷發達は諸科學の既に起り

たる變遷若しくは現在起りつつある、或又將來起らんとする變遷發達の表象、若しくは前兆なりと看做すことを得べし。然り、而して現今の學界至る所に於いて唯物論の頹廢を見る。驚くに足らざるなり。往年(一九一三年)巴里に於いて催されたる『信仰及生命講演會』(congrès de Foi et Vie)は最近思潮の大勢を示す一端と見ることを得べし。今同講演會に於ける講演の大體を窺えば亦以つて天下の大勢の赴く所を知るに足るなり。同講演會は數名なる著名の人士の講演ありたり、彼のベルグソン氏の『精神と物體』を初めとし、佛國現代の哲學者にして法則の一般的意義を明かにせる名著「Lectures de Gedanken」の著者たるポアンカレ氏の『物質に關する新解釋』フリーデル氏の『唯物論と生命學上の新觀念』スイッドギゾー氏の『唯物論と文學』リュール氏の『文學上に於ける自然主義より理想主義へ』及ローズ氏の『劇と唯物

論』等の諸講演是れなり。而して其の論ずる所を見れば各自等しく非唯物論の見解を持せるが如し(同講演會の内容を知らんとするの士は同會發行の『信仰及生命雜誌』(la revue Foi et Vie)及『現代唯物論』(Le matérialisme actuel)につきて見るべし)。予は元より此講演會の講演に示せる態度を以つて直ちに學界一般の傾向なりと斷言するものにあらず、然れども亦注目値なしと連斷するを好まず。梧葉落れば秋風既に來る、薄氷を踏めば堅氷の既に至るを知る、今日唯物論が四面楚歌の中にあること亦否定すべくもあらず。今日一城を拔かれ明日亦一城を拔かれんとし、さしもの堅城も今や孤城落日の感なくむばあらず。一事を以つて全般を律するは群盲象を評するの誹なきにしもあらざるも尙此講演會の聲は少くとも變化を告ぐる曉の鐘の音と看做すことを得べし。哲學より蟬脱して起りたる我經濟學は、換言すれば第三階級の

interessene Philosophie として興り *oikonomiky* より *Volkswirtschaftslehre* に進み、一つの科學となりたる我經濟學は(經濟學は未だ論理的には科學として完全に立證せられず、然れども既に確立せるは事實なり)果して此變遷發達の影響を受けざるや否や。吾人の正さに究めんとする所は全く此處に存せり。

經濟學は唯物的色彩を脱すること能はずとは多くの人の信ずる所なり。蓋し、此は『經濟學は富の學問なり』との觀念より來りたるものなり。『富(有形財の意)の學問なり』との意は『如何にして』如何なる手段『如何なる法則』によりて物質上の必要品を得んとするやを究むる學問なりとの義なり。如此普通經濟學は『富の學問なり』とし、從つて唯物論なりと看做されつつあり、(眞の意味に於いて經濟學を富の學問なりと定義し去りて平然たる學者は今日甚だ少し、此の定義に極端に反對せしものは『經濟學

の出發點も到達點も共に人間なり』と云ひしロツシャールなり。而して中庸の見を探れるはマアシャルにして『財と人との關係を論ずるものなり』と云へり。故に經濟學が非唯物論となりつゝありと云ふは非難の存する所にして、又之れを研究せんとするは一種の賭事なりと云はざるべからず。我經濟學が天下の思潮の流れに棹して進みつつあるや、果た亦逆行しつつあるやは經濟現象の研究に従事する人士に對して興味ある問題なり。是は好箇の問題たるも亦同時に至難の問題なり。

第二章 物理的意味に於ける富の觀念の發遷

一八六一年ラサルレが「System der erworbenen Recht」を出したる當時の法律學、或又一八〇七年ギョーテが「Morphologie」を出したる當時の自然科學、或又ゾンバルトが「Der moderne Kapitalismus」を出したる一九〇二年當時の社會

科學に於いては『經驗か理論か』の問題は是等諸學に於ける中心議論なりしなり。

Nur-empiriker は理論の無用を説き、Nur-theoretiker は經驗を無視せり。然れどもカントの“Erfahrung ohne Denken sind blind, Denken ohne Erfahrung leer.”なる『純性批判哲學』中の一句は是等兩者の缺點を指適するに充分なりしなり。彼のガンス、ルダッシーの言趣味なしと云ふべからず。

Wir haben uns vor Oekonomik aus blosser Erfahrung, vor blinder Oekonomik geschützt wie vor der ihr entgegengesetzten leeren. Die wirtschaftliche Energie. Vorwort VIII.

此句とカントの句とを比較すれば此間の消息の相通するものあるを見るべし。今日經濟學に於いては是等の問題に關して疑點少し。此問題に代りて提供せられたるは經濟學は果して唯心化せりやの問題なり。而してこれを解決するの困

難なるは前者に譲らざるべし。蓋し、經濟學は飽く迄唯物的なりと信ぜらるゝが故なり。換言すれば經濟學は物理的意味に於いても、倫理的意味に於いても其本質に於いては徹頭徹尾唯物的なりとせらるゝが故なり。されば予が經濟學の科學的性質の變遷を論ずるに當り、物理的方面と倫理的方面との二方面より究めんとする所以も此處に到りて明かなるべし。予は今經濟學の全般に涉りて此れを究めんとするにあらずなり。只富の觀念の發達のみを究むるなり。蓋し價值論は經濟學と他の諸科學とを區別し其科學上の地位を決定するものなるが故なり。此處に價值と云へるは經濟的價值を意味するものなり、即經濟學研究の對象となるはあらゆる價值にあらずして經濟的なる形容詞を冠する價值なり。他の諸科學も經濟學が經濟價值を研究の中心とするが如く、其中心として究むる價值を有せり。例へば哲學は其認識論に於いて認識

の價值及認識價值の尺度を中心として究め、倫理學に於いては人の行爲の倫理的價值及其尺度を、美學に於いては其藝術品の價值及其價值の尺度を其中心として究むる等之れなり。されば經濟學の變遷を論ずるに當りて價值論の變遷のみを究むるも強ち不當と云ふべからず。

第一節 フィヂオクラシーの價值論

經濟學を一の科學となし、他の科學と區別せらるゝに至りしは全く佛國のフィヂオクラシーの賜なり(其當時は economists なる名の下に總括せられたるが、後世フィヂオクラシーの名行はる)故に此派を看倣して經濟學の祖なりと云ふは斯學の通説とする所なり(アダム・スミスを經濟學の祖なりと云ふは常らず)然るに世の淺薄なる經濟學者、若くば經濟學を知らずして經濟學史を講ずる潜在經濟學者の輩はフィヂオクラシー以前にも經濟學存せりとなせり、彼のアリストテレスが『自然なる經濟生活』(Oikonomia)

nomik)と『不自然なる經濟生活』(Chrematistik)との區別を來せるを見れば經濟學の祖を此處に求め或又プラトンが偶然に富、生産、分配、國家及社會の經濟學官能を論ずるを見れば經濟學の祖を遡つて此處に求め或又グローテアスが自然法を捨て、pro natiute によりて法律を説明せんとするを見れば此れを其の祖なりとなす。然れども是等は飽く迄倫理學を脱すること能はず、其經濟思想と見るべきの反つて倫理的思想なり。されば吾人は科學としての經濟學の祖なりと是等を看倣すること能はず。蓋し生活必要以上に財を得るは罪惡なりとの見解行はれし當時に經濟學の存せざりしは怪しむを要せざるなり。ストア哲學及エビキュリアン主義が最近の哲學經濟學に影響を及ぼせるは、ハスハツハ教授が其著『經濟學の哲學的基礎』に於て詳論せる所にして吾人之れに異議を有するものにあらずと雖も、尙經濟學說に過ぎずして、科學としての經濟學

を求むるに由なし、或又 “We ought to obey God rather than man” の思想若しくは “*turpe lucrum sequitur qui minus emit ut plus vendat*” の思想、或又 “*qui plus quam dedit accipit, usuras expetit*” の思想行はれて、經濟行爲を爲すを赦されしは僅にして、*ubi jus belli, ibi est an jus usurae*” の言之れを示す。此くの如き思想を中心とせる中世紀の基督教の時代に經濟學を見ること能はざりしは尤なりと云ふべし。トマス・ダキノの經濟學說如何に卓絶せりと云ふも *Tractatus de Origine, Natura, jura, et Mutationibus Monetarum* の著者たるニコル・オヘスメの經濟思想がロッシア及ウオロウスキーの云ふ如き驚歎に値するものありと雖も、人は時代の予たるを免れず。此時代より見れば其經濟學說の如何なるものなりしを知るに難からず。彼の國民經濟の成立を促がすに大なる効果を有したりしメルカンテイリズムを看做して經濟學の

祖なりと云ふこと能はず。こは學派にあらず、教訓にあらず、されば師なく、教なし、換言すれば學理と云はんより、一の商業政策なりしなり。假令、アダム・スミスが其名著『富國論』に於いて、此政策を辯難攻撃せん爲めに、トマスの *England's Treasure by Foreign Trade* に倚りて、此學派の主張を紹介せしも(註一)是れを以ちて直ちにスミスがメルカンテイリズムを一の學說なりと看做したりと斷言せばこは餘りに輕率なりと云はざるべからず、蓋し、彼れは『富國論』第四卷に於いて此れを眞理の爲めの欲望より發して來れる智者の議論にあらずとて此派を一つの學派と看做さざりしが故なり。而して今や其の祖を求めてフィデオクラシイに求めたり、これ予の獨斷にあらずして通説とする所なり。Ce sont aussi les physiocrates qui ont constitué la première “école” d' Economistes, dans le sens le plus complet de ce mot. Gide et Rist,

Histoire de Doctrines Economiques, p. 3

吾人先づ最初フィデオクラシイの價值論を研究する亦故なしとせず。

Physiocratie なる語は希臘語の *Physis* 及び *Kratein* の二字より來るものにて “*gouvernement de la nature*” の意なり、是れ予が原語により重農學派、若しくは物理主義派なる譯語を用ひざる所以なり。此派の根底は當時の哲學たる自然法哲學に得たり。世人多くフィデオクラシイの根底を爲せる哲學をモンテスキューの自然法に得たりとするものあり、然れども當らず、此哲學は英國に生れたるものにして哲人ロック當時のスコット朝の專政政治を罵る爲めに彼の和蘭人グロチアスが其著 “*Du droit de la guerre et le la paix*” にて主張せる見解を探るに至りて起りたるものなり。然れどもモンテスキューの *L'Esprit des Loix* の影響を受けたりしことは否定すべくもあらず。同書に於いては

自然法的見解が明かに現はれつゝあるを見ることを得べし、序文に曰く “*je n'ai point tire mes principes des mes préjugés, mais de la nature des choses*.” 又同書の卷頭に曰く “*Les lois sont les rapports, nécessaires qui dirivent de la nature des choses*.” 上述の事はフィデオクラシイの學說を述ぶるに要なきが如きも、實際は然らず。此事實を無視しては同學派を完全に了解すること能はず、而して予の同學派に關して究めんとするは富の觀念なり。

同學派の創設者として知らるゝケネーの主張によれば土地より産出せるものゝ富となし、他のものを富となさず。農業鑛業に従事せる勞働のみ生産的となし、他を生産的となさず、商業及工業を看做して *un mal nécessaire* となせり。今彼れの著なる *Tableau Economique* (一八九四年英國經濟協會の爲めに眞寫せる倫敦版による) 中の一節を抽出して其見解の大要を示さ

んと欲す。曰。

Les Dépenses productives font employées à l'agriculture, prairies, pâtures, forêts, mines, pêche, &c. pour perpétuer les richesses, en grains, boissons, bois, bestiaux, matières des ouvrages de main-d'Oeuvre, &c.

Les Dépenses stériles se font en marchandises de main-d'Oeuvre, logemens, vêtemens, intérêts d'argent, domestiques, frais de commerce, denrées étrangères, &c. p. 2.

或又此書にある有名なる法式を見ればフィデオクラシイが土地のみを以つて富なりとなしたるを知ることを得べし。今参考の爲め同派の學者にして此派の盛衰と密接の關係あるチルブーのRéflexion sur la formation et la distribution des richesses (アシェンイ版)により彼れの價值説否價値論より當然生ずべき社會階級を示さんとするはフィデオクラシイに屬する殆どすべての學者の採る所なりと云ふことを得べし。

1. Disposable Class

{ proprietor of Land (as to both his person and Revenue)	
{ capitalist (as to his person)	
2. Productive Class

{ undertaker (mining, fishing, hunting, agricultural.)	
{ workman.....same	
3. Stipendiary Class

{ undertaker	{ Industrial
{ capitalist	{ Commercial
{ (as to revenue)	{ (agricultural, industrial, commercial.
{ workman	{ industrial.
	{ commercial.

フィデオクラシイは全然商工業を不生産なりと主張せりと多く云ふ所なるも、彼のケネーヌ其經歷を異にせるグルネーは然らず、アダム・スミスの所謂フィデオクラシイの capital error となせる『商工業不生産説』を多少寛和せり。然れども大體に於いて『土地は富なり』『富は土地なり』との見解を持せりと云ふことを得べし。(註二) 彼等は思へらく、自然は不可思議なる魔力を有し、新物を創造するは其神秘の力によるとなし、農業のみ富を創造し増加せしむのものと爲せり。彼の伊太利の經濟學者として令名あるコッサー氏の同學派に對する説明は簡なれども要を得たる所ありと信ず。曰く。

Partendo dalla ipotesi di un ordine di natura (fisicrazia), che le leggi positive devono conservare, questa scuola propugna la piena libertà di concorrenza (laissez faire, laissez passer), affinché la classe produttiva(agricoltori) ottenga con poca

spesa i servizi delle classi sterili, ma necessarie (manifattori, commercianti e professionisti), cresca così la rendita dei proprietari(classe disponibile), cioè il prodotto netto, su cui cade l'imposta, la quale, per evitare soverchie spese e moleste ripercussioni, deve essere unica e diretta. Cossa, Primi Elementi di Economia Sociale p. 20-21.

フィデオクラシイの學説を物質の見地より批判せば其見解を全然誤謬なりとして退くること能はず。然れども何にが故に富を物質以外に求めざるや此れ疑問の存する所なり。富の觀念を物質のみに求む、完全に富の性質を説明すること能はざるや明かなり。ベナス・ド・ミロの切り出したる大理石の吾人に對して價值あるは其形狀、其意匠、其色彩に存せり。

されば廣義の勞働を生産の意味に用ひざるは誤謬なること明かなり。アダム・スミスの攻撃によりて倒れたる、否其れ以前チャルコーの死後

直ちに行はれざるに至りしは蓋し當然と云ふべきなり。只同學派の經濟學に與へたる貢獻はアダム・スミスに影響を與へたりしこと註(三)及自然法の見解より偶然出でたる『生存權』(Droit à l'existence)の主張之れなり。更らに此『生存權』より發したる後世の『勞働權』(Droit au Travail)の遠因を存するに至りしこと等は其の主なるものなり(註四) Avant toute société, il y a pour l'homme, selon tous les maîtres de l'Ecole, un droit et un devoir, le droit de s'emparer de tout ce qui lui est avantageux et le devoir de travailler à cette prise de possession ;..... Espinas, Histoire des Doctrines Economiques, p. 216. 社會關係の外に權利ありとは一見奇なるもこは畢竟するに此學派の特質より生ずるものなり。蓋しフィデオクラシイは自然法を歴史的制度を超越せるものと看做したるが故なり。

(註一) 三田學會雜誌九月、十月、十一月號、高橋教授の

- 『トーマス・マンと其時代』參照
(註二) シード及リストの共著『Histoire des Doctrines Economiques p. 5』參照
(註三) ナルホーの著『The Formation and the Distribution of Riches』(マンハーク版)序文十三頁參照
(註四) マナー著『Philosophy and political economy, p. 144-145 參照』

第二節 勞働と價值

フィデオクラシイの價值は學說そのものよりは其結果生じたる破壊にあり。(註一)されば此學派の中心と爲せる價值論の妥當ならざるは元より其所なるべし。これに代りて起りたるは勞働價值論なり。こはアダム・スミス及リカルドの唱へし所にして、ス氏はリ氏に比せば尙純然たる勞働價值論と云ふこと能はざるなり。スミスは價值の基礎を勞働に置きたるもこは原始時代に限り。註(二)リ氏も亦資本を無視せず自己の任意に造ることを得るものゝみ勞働に定まるべしと云へるも人の任意に造ること能はざる稀

有物は然らずと云へり。然れども予が勞働價值論として論せんとするはスミス及リカルドにあらずしてカール・マルクスの勞働價值論なり。彼れは曰く、

Als Werte sind alle Waren nur bestimmte Masse festgeronnenes Arbeitszeit Das Kapital, Band 1. S. 6.

此處に勞働時間と云へるも個人の費す勞働時間にあらずして gesellschaftlich notwendigen Arbeitszeit を意味せるものなり。今勞働價值論を信ずるの徒なし、然れども彼れの價值論の誤なるを以つて直ちにマルクスの學界に貢獻せしことを否定せんとするものあらばそは輕率なりとの誹謗を免るゝこと能はず。或又彼れの「唯物史觀論」誤謬あり、故に彼れの經濟學說も誤ありと云ふものあらばマルクスを解せざるものと云ふべし。此れと彼れとは別物なり、前者に誤ありと雖も後者に關せざるなり。一つの誤りを以つて

直ちに他も然りと爲すこと能はず。wir meinen hier nicht seine Geschichtsauffassung, denn diese Auffassung steht nicht im Zusammenhang mit seiner exakten Theorie. Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. S. 98. シンペターの言正るに予の云はんと欲する所を洞破せしものなり。彼れの『唯物史觀論』採り難きも、彼の『勞働價值論』誤謬なるも可なり。彼れの偉大はそれによりて毫も損せざるなり、彼れの偉大は經濟學に經濟生活發展の理論を齎したること是れなり。デードは其著『經濟學史』に於いてこれを明かにせり、曰く、

l'une qu'on pourrait appeler "statique", l'autre "dynamique", pour employer les dénominations d'Auguste Comte. p. 520.

此れ予の上述の語と相去ること遠からざるを知る。此デードの説を更らに詳細に力説せるものはシンペターなり。曰く、

Seine Akkumulations—, seine Verelendungs—, seine Zusammenbruchstheorie ergeben sich wirklich aus rein ökonomischen Gedankengängen und stets ist sein Blick auf das Ziel gerichtet, die Entfaltung des Wirtschaftslebens als solche und nicht bloss seinen Kreislauf in einem bestimmten Zeitpunkt gedanklich zu durchdringen. a. a. O. S. 98.

(註二)

經濟發展の理論を見出さんとする所に彼れの努力の存する所なり。然れども正統學派の學說を基礎とせるものなれば全然靜的見解より脱すること能はざりしは否定すべくもあらず。彼れの『勞働價值論』はフィデオクラシイの價值論と比較せば唯物的色彩を有すること少きも、而かも尙全然唯物的見界を蟬脱すること能はず。思ふに勞働價值論はマーシャルの屢々例證せる theoretische の價值を説明するに能はざるなり。マルクスの社會主義者に與へたる效は其『勞働

價值論』より當然生ずる社會權の一なる勞働全收權(Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag)を主張せし點なり。此れ社會問題研究者の正に注目すべき所なり。

(註一) イェンハイム History of political Economy. 六三頁參照

(註二) アダム・スミス『富國論』(アムステル版)三〇頁及四二頁參照

(註三) 福田博士著『續經濟學講義』四二頁より四三頁參照

第三節 欲望と價值

財とは物理的のものを云ふか、若しくは人の心理を離るゝこと能はざるものを云ふや。是れ久しく學界の問題なりしなり。然れども財とは物に存するにわらずして人に存するもの、換言すれば物理的の性質によるにわらずして人の心理によるものなりとは今日の通説なり。欲望と財との關係を論じたるものは今日初まりたるものにわらず。千古の哲人アリストテレス既に價值は欲望と財との關係より生ずると云へり。下つ

ではエンゲルが其著 Entwicklung der Gesetz des menschlichen Denkens, Braunschweig. 1854.

(此版の書少し多くは一八八九年の柏林版による世に傳はるは此版なり)に於いて精巧なる議論を發表したり。曰く、財の有する價值は人の享樂の量によりて定めらるゝなり、而して此享樂は欲望の満足に従ひ遂に飽和點(Sättigungspunkt)に至るものなりと云へり。此語簡なりと雖も、後世學者の云はんとする所を克く半世紀前に洞破せり、其見識の雄、欽慕すべく、其著想の妙仰ぐべし。只文章の難解なる金玉の瑕瑾なるか。但し欲望價值論の勢力を今日の如くならしめしは全く埃太利學者の效に歸せざるべからず。今同學派の主張を擧げん。こは此學派の代表者たるヘーム・パウヘルクの言なり。

Das Grösse des Wertes eines Gutes bemisst sich nach der Wichtigkeit desjenigen Konkreten Bedürfnisses der Teilbedürfnisses, welches unter

den durch den verfügbaren Gesamtvorrat an Gütern solcher Art bedeckten Bedürfnissen das wenigst wichtige ist, nicht der grösste Nutzen also, den das Gut stiften könnte, ist für seinen Wert massgebend, auch nicht der Durchschnittsnutzen, den ein Gut solcher Art stiften kann, sondern der kleinste Nutzen, zu dessen Herbeiführung es seinesgleichen in der konkreten wirtschaftlichen Sachlage rationaler Weise noch verwendet werden dürfte.

Böhm = Bawerk, Kapital und Kapitalzins, 2. Aufl., Bd. 1, S. 159.

是れ同學派の主張なり、彼のジードが價值なる言葉の代りに desirabilité なる語を使用するを適當なりと云ふは其意必ず此處に存するなり。元より吾人の欲望は物の物理的及化學的性質に或る關係を有することは明かなる事實なり。然れども此物理的若しくは化學的性質は價值を決

定する重要なもの、換言すれば價值の決定的要素にあらざるなり。人の心理上の要素こそ價值を決定せる重要な要素なり、價值とは物に對する吾人欲望の反影なりとはデードの言なるが此關係を説明せんとせしものならん。

上述せし所によりて、『欲望價值論』が『勞働價值論』より稍非唯物的なることを知るを得たり、而して尙『勞働價值論』が『フィデオクラシー』の價值論よりも非唯物的なることを知るを得たり。是れによりて見るに富の觀念は第一段より第二段、第二段より第三段と漸次非唯物的に進みつゝあるは明かなる事實なり。此くの如く富の觀念は漸次非唯物的の傾向を有せり。今論じたる『欲望價值論』は果して富の心理化の極地なりや否やは疑の存する所なり。予は更らに次節に於いて更らに心理化せしを示さんと欲す。

第四節 信任と價值

を云ふなり。吾人が事物を欲するは其事物が吾人の欲望を満足せしむべしとの信任より生ずるものなり。吾人酒を欲し、又之れを價值付くるなり。倫理的意味に於いては酒は善なりと云ふこと能はず、然れども經濟的意味に於いては財なり、富なり、是れ蓋し、酒は吾人を溫め、慰安を與ふべしとの吾人の信任によるものなり。タルドー(註一)及アスピナは經濟的進化に於いて信任の貢獻する所頗る大なるを説けり、後者曰く。

L'avenir, disait ce dernier, sera fait de ce que nous aimons le plus, et comme le désir à son tour repose sur la croyance.....l'avenir sera fait de ce à quoi nous croyons le plus.

と之れによりて予の説の必ずしも獨斷によるものなきことを明かにせり。吾人一度價值の大變動ある彼の取引所を見れば更らに明かに此關係を知るを得べし。取引所に於けるすべての價

Elementi o cause del valore sono:

1° L'utilità (nel significato economico);

2° La difficoltà di acquisto delle ricchezze, derivante o dalla limitazione relativa della loro quantità(rarità)per le ricchezze naturali e per alcune artificiali, che non si possono riprodurre, o dalle spese necessarie per procacciare le altre. Cossa, Primi Elementi di Economia Sociale, p. 95.

コッサの云へるが如く價值の要素には *l'utilità* 及び *La difficoltà di acquisto delle ricchezze* あり。即其根底には利用存して之れを人が認識するによりて生ずるものなり、換言すれば *desirabilité* によるものなり。然れども此 *desirabilité* は偶然的に生ずるものにあらず。必ず其根底に之れを生ぜしむるの動力存するものなり其動力を求めて予は *la croyance à la satisfaction desirée attendue* に得たり。換言すれば豫定(希望せし)の欲望の充足を得べしとの信任(註二)

値の昇降は豫想即斯くの如くあるならんとの信任より生ずるものなるが故なり。信用は富なりとは此意味に於いて初めて意義を有するに至るべし、信用なる語は *credit* (佛); *credit* (英) *Kredit* (獨); *credito* (伊); の意味にして *credentia* 若しくは *credere* より出でたるものなり、而して *credere* の字は既に *un acte de confiance* の意味を包含するなり、吾人若しも物の *信用* を信ぜざらんか必ずや其物に對する欲望生ぜざるなり。之を要するに價值は信任と同時に生じ、信任なき所價值生ぜざるなり。此處に至りて初めて物理的意味に於いて富の觀念が唯心化の極端に至りたりと云ふことを得んし。(未完)

(註一) タルドー著 *Logique sociale*, ch. VIII を參照すべし